

茨城高等学校・中学校

校長室だより

2025 年 12 月 12 日

愛の歌が聞こえる

11月15日(土)から26日(水)にかけて、2025東京デフリンピックが開催されました。デフリンピックとは、聴覚障害(Deaf)のあるアスリートのための国際スポーツ競技会です。オリンピック同様、夏季と冬季の大会がそれぞれ4年に一度開かれます。オリンピックやパラリンピックに比べて、おそらく知名度は高くないデフリンピックですが、実はその歴史は古く、1924年にフランスで第1回大会が開催され、今年で100周年を迎えるとのことでした。

そのデフリンピックが初めて日本で開催されることになりました。大会前にはメディアやSNSがデフリンピックを取り上げ、開催に向けての機運を高め、大会が始まると毎日のように日本人選手の活躍が伝えられるなど、2025東京デフリンピックは成功のうちに幕を下ろしました。

自分の知る限り、デフリンピックの競技が地上波で中継されることはありませんでしたが、日本人選手の活躍はスポーツニュースなどで詳しく報じられていました。そこでは、選手たちの障害との向き合い方がとりあげられることも多く、選手たちが異口同音に「以前は障害を悪いもの、恥ずかしいものと感じていたが、今では自分の個性の一つだと考えるようになった」「競技を通じて同じ障害を持つ人たちを勇気づけたい」と話していたことが非常に印象的でした。

デフリンピックでは、競技中に補聴器や人工内耳などを用いることは一切できません。そこでスタートの合図や審判の指示などはすべて、光や旗、ジェスチャーなど視覚的なものに置き換える必要があります。また、選手たちにとって聞こえない状態で競技をすることの難しさもあります。男子4×100mリレーで金メダルに輝いた富永幸祐選手は「補聴器を付けていれば声や足音で後ろから来る走者との距離やタイミングをはかることができる。しかし補聴器を外した何も聞こえない状態では、仲間を信じてバトンに手を伸ばすしかない」と話していました。

インターネット上にはデフリンピックの競技動画がいくつもアップされています。自分はYouTubeで、テニス女子シングルスで銅メダルを獲得した^{こもかた}菰方里菜選手とドイツ人選手の準決勝の試合を視聴しました。日本人の中でも小柄な菰方選手は、サウスポーの厚いグリップから繰り出すトップスピン(注1)とコート上を縦横無尽に走り回るフットワークが特徴です。対するドイツ人選手は、映像で見ると身長180センチ超えの長身で、強烈なサーブ、ショットを武器に攻撃的なテニスを得意としています。第1セットを5-7で落とした菰方選手は、第2セットに入ると、俊敏なフットワークを活かしてドイツ人選手の強力なボールに食らいつき、長いラリーに持ち込みます。相手のミスを誘い、第2セットを6-3で取り返すと、最終第3セットは両者とも一歩も引かない攻防となり、試合は6-6タイブレークにもつれ込みました。タイブレーク序盤をリードした菰方選手でしたが、徐々に相手にペースを握られ、最後は勝負をかけたフォアハンドの強打がネットにはじかれ、惜敗しました。

動画を視聴し終えて自分はふと、彼女たちが聴覚障害者であることを忘れていたことに気づきました。菰方選手のワンプレーに一喜一憂し、試合に熱中していた自分がいました。スポーツが与えてくれる感動に、健常者も障害者も違いは無いことを改めて実感した経験でした。

2021年にアメリカで製作された『コーダ あいのうた』という映画があります。「コーダ」とは「Children of deaf Adults」の略で、「聴覚障害のある親を持つ子ども」の意味です。『コーダ あいのうた』は聴覚障害というシリアスなテーマを扱いながら、決して重くて暗い映画ではなく、障害とともに生きる人たちを、生き生きと、時にはコメディータッチで描いた作品です。

映画の主人公ルビーは、アメリカ北東部の海沿いの町で暮らす、ごく普通の高校生です。彼女は両親と兄の四人家族で暮らしていますが、ルビーの家族には他の家族とは異なる特殊な事情がありました。家族四人の中で耳が聞こえるのはルビーだけ。彼女の両親と兄は、音を感知することができない重度の聴覚障害者なのです。しかし、彼らからは障害のもたらす暗さのようなものは微塵も感じられません。がんこで気さくで陽気な父のフランク、美人コンテスト優勝経験がある、ちょっと「ぶっ飛び」気味の母のジャッキー、女の子にやたらモテて、手の早い兄のレオ。レオとルビーは、互いに悪口を言い合うのがあいさつ代わりです。四人は、聴覚障害という特殊な事情を除けば、どこにでもいそうな仲の良い家族です。

フランクとレオの仕事は漁師です。二人は毎日小さな自家用漁船で海に出て魚を捕り、それを漁業組合に買い取ってもらって、ルビー家族は暮らしています。しかし、漁業組合の魚の買値は安く、フランクやレオは常に不満を口にしています(もちろん手話で)。船には無線が取り付けられており、海上保安局からの注意や指示が随時送られてきます。しかし、フランクやレオには、無線から発せられる音声は聞き取れません。そこで必要となるのがルビーです。ルビーは無線を聞き、それを手話で父や兄に伝えるため、漁に同行しているのです。家族の中でただ一人耳の聞こえるルビーは、漁に限らず日常生活の中でも、皆にとってなくてはならない「通訳」なのでした。

ルビーは歌うことが大好きな少女です。漁船の上でもロックやポップスを大音量で流し、それにあわせて歌いながら、父や兄の手伝いをしています。彼女の伸びやかで力強く、それでいて繊細な歌声には、聞く人の心を惹きつけずにはおかない何かがあります。

こうして毎朝、漁の手伝いをしてから高校に登校するのがルビーの日課ですが、高校は彼女にとって必ずしも居心地の良い場所ではありません。漁の疲れから居眠りをして教師に注意されたり、友人たちの中には、ルビーの特殊な家族環境について差別的な言動をする者もいます。そんなルビーは、ある日ひょんなことから高校の合唱クラブに入ることになります。クラブの顧問の「V先生」は、声域の分担を決めるため新入部員に一人ずつ短いパートを歌わせていくのですが、自分に自信の持てないルビーは人前で歌うことができず、その場から逃げ出してしまうます。しかし後日、V先生の自宅を訪れたルビーの歌声を聞き、先生はすぐにその才能に気づきます。ルビーは、同じ合唱クラブの男子生徒マイルズとデュエット(注2)を歌うこととなり、二人はV先生の特別レッスンを受けることになります。少し頼りないけれど優しく誠実なマイルズに、ルビーは徐々に惹かれていきます。

『コーダ あいのうた』は、さまざまなテーマを含んだ映画です。聴覚障害者と健常者の共生、V先生とルビーのちょっと風変わりな師弟愛、マイルズとルビーの淡い恋など複数の糸が縊り合

されて一つのストーリーが紡がれていきます。しかし、そうした中で、この映画の主旋律を奏でているのは、ルビーとその家族の愛と葛藤の物語です。

漁の手伝いとレッスンの両立は簡単ではありませんでした。たびたびレッスンに遅刻して先生の怒りをかったルビーは、ある日、レッスンを優先させて漁を無断で休んでしまいます。折悪しく、その日は、海上保安局の監査官がフランクとレオの船に乗りこみ、違法な漁業が行われていないか検査を行う日でした。そこで、保安局からの無線が流れても一向に気づかず平然と漁を行う二人に、監査官は仰天します。保安局は、「今後、耳の聞こえる健全者が乗船しない状況では、操業を許可しない」との決定をフランクに伝えます。

一方で、V先生はルビーの才能をこのまま埋もれさせたくないと考えていました。「奨学金で音楽大学に進学する気はないか？」と先生はルビーに問いかけます。しかし、それはルビーにとって、耳の聞こえない家族を残して家を出ることを意味しました。ルビーは悩んだ末、両親に相談します。父フランク、母ジャッキーの答えはともに「No」。家族は一緒に暮らすものだ、お前がいなくなったら誰が通訳をするんだ？、漁をすることもできなくなってしまう。予想通りの両親の反応に、ルビーは大学進学をあきらめようと決意します。しかし、兄のレオだけは「家族の犠牲になって夢をあきらめるのか？お前はそれでいいのか？」と激しい口調でルビーに詰め寄ります。

そんなとき、ルビーの高校の合唱クラブがコンサートを開催することになりました。ルビーはメインパートの独唱を任せられ、家族をコンサートに招待します。小さな田舎町では高校のコンサートも立派な娯楽です。町の人々が次々と会場に詰め寄せる中、ルビーの両親、フランクとジャッキーも会場にやってきます。しかし耳の聞こえない彼らにとって、音楽は退屈でしかありません。二人はコンサートの最中に手話で夕食の献立の相談を始める始末です。

やがてステージにルビーが登場します。「俺たちのベイビーだ」フランクとジャッキーも手話のおしゃべりをやめルビーに注目します。曲がルビーのパートにさしかかり、ルビーが歌い始めると、会場の空気が一変します。ルビーの美しい歌声は、観客たちを一瞬のうちに魅了してしまうのです。

ここで突然、映画から一切の音が消えます。聴覚障害者の世界がバーチャル(注3)で再現されます。無音の世界の中で、フランクはゆっくりと会場を見渡します。曲に合わせて体をゆする人、うっとり陶酔した表情の人、中には涙ぐんでいる人もいます。そんな観客たちの様子を不思議そうに眺めていたフランクは、それがルビーの歌声によってもたらされたものだと感じます。フランクはルビーの特別な才能を初めて理解するのです。

その日の晩、家の前に停めたトラックの荷台にフランクが一人で座っていると、ルビーがやってきて父親の隣に腰をおろします。二人はしばらく黙ったまま星空を眺めます。やがてフランクはルビーに手話で「歌ってくれ」と頼みます。一瞬とまどった表情をしたルビーですが、立ち上がって歌い始めます。ルビーは父の願いどおり渾身の力で歌い、フランクは聞こえない耳を澄まして娘の歌に聴き入ります。そしてついに両親は、音楽大学のオーディションを受けることを応援する、とルビーに告げるのです。

聞こえない父に向かって、ルビーが全身全霊で熱唱する場面は、観ていて、涙がボロボロこぼれました。あの歌は、ルビーが自らの夢を追い求める歌であり、家族の愛を紡ぐ歌であり、家族が新しい未来に一步を踏み出す歌だったのだと思います。

家族の愛情に包まれて育った一人の少女は、ある日、自分の未来に出会います。しかし、その未来を現実のものとするためには、愛する家族のもとを巣立っていかねばなりません。誰にでもいつかは訪れる青春の旅立ちを、『コーダ あいのうた』は等身大の少女を通じてさわやかに描いています。見終わったとき「ああ、いい映画だったなあ」と思える作品です。ぜひ生徒諸君にも観てほしいと思って、今回の校長室だよりで取り上げました。

ただし、『コーダ あいのうた』では、特に性に関してオープンなルビの両親が、ちょいちょい結構な下ネタをぶちこんでいます。冬休み、こたつでミカンを食べながら家族団らんで観るときなど、十分な注意が必要だということを忠告しておきます。

子どものころ、耳が聞こえなかったり目が見えなかったりするのって、どんな気持ちがするのだろう？と想像したことはありませんか。私たちの多くは、音のない世界、光のない世界を知りません。

もしもテレパシーが使えることが当たり前の世界に、今の自分が迷い込んだらどんな気分だろう？と考えてみました。皆があたりまえにテレパシーでやりとりする中、自分だけテレパシーが使えないわけですが、それが今までどおりの自分だとすれば、あまり違和感はないのかもしれません。でも、他の人と違ってることによって不当な差別を受けたり、逆に過剰な同情をされたりするのはちょっと嫌だなあ、と感じました。(終)

注1) トップスピン

テニスで、ボールに強い順回転をかけること。トップスピンのかかったボールは相手のコート上で鋭く落ちる軌道を描き、高くバウンドするのが特徴。

注2) デュエット

二人が同時に歌うこと。二重唱。

注3) パーチャル

現実そっくりに作られたもの。あたかも現実のように感じられること。

【おまけの雑談】

今回の校長室だよりを書くにあたって、数年前に観たきりで、記憶があいまいになっている点多かったため、某TSUTAYAに『コーダ あいのうた』を借りに行きました。最近、映画はサブスクばかりで、DVDを借りるのは久しぶりだったのですが、何と会員証の有効期限が切れていました。店員のお兄さんに「身分証明ができるものありますか？」と聞かれ、運転免許証を渡したのですが、お兄さんはパソコンを操作しながら「あれ？…あれ？」と小声でつぶやくばかりで、なかなか免許証を返してくれません。

もしかしたらお兄さんに偽造免許証を疑われて、警察に通報されているんじゃないだろうか？と不安に思えてきたころ、ようやくお兄さんが免許を返してくれて、「会員証の更新に通常は220円かかるのですが、60歳以上の方はシニア割引で更新料はかかりません。また、今日は金曜日なのでシニアの方はDVD1本が無料になります。ということで、今回は料金は一切いただきせ

ん」と言われました。こんなことってある？！

全額タダになったのはうれしいけれど、ああ、ついに自分もシニアと呼ばれる年齢なのだな、と少し複雑な気持ちになったできごとでした。

2025年も残り半月余りとなりました。来る2026年が、素晴らしい年となることを祈念いたします。それでは少し早いですが、皆さま、良いお年をお迎えください。

※「校長室だより」は、本校のHPにも掲載しています。バックナンバーを読みたい人は、HPの「学校案内」→「校長室だより」からどうぞ。